あすへの話題

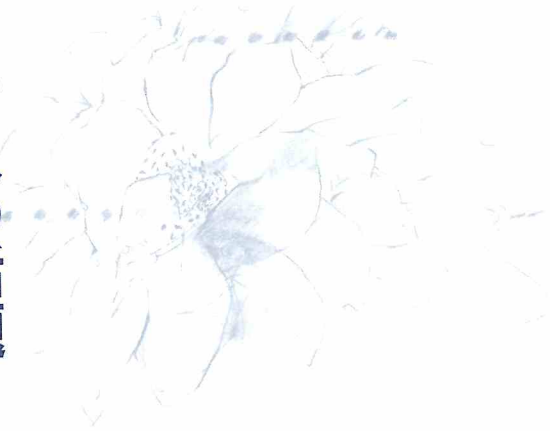
日本経済新聞
平成23年1月6日→6月30日 連載

ぐるなび 創業者・会長
滝　久雄

日本経済新聞
平成23年1月6日→6月30日連載

あすへの話題

ぐるなび 創業者・会長
滝　久雄



平成23年1月6日より6月30日までの木曜日、
日本経済新聞夕刊第1面の『あすへの話題』に連載した
原稿23編を収録しました。

表紙・挿画
佐野　ぬい（女子美術大学名誉教授）
表紙はステンドグラス「動く青い世界地図」原画
（成田スカイアクセス・成田空港駅）

目次

第1回　楽をして成功する方法（1月6日）——6
第2回　趣味は「人間を考える」（1月13日）——8
第3回　高齢化社会と芸術家（1月20日）——10
第4回　囲碁人気への妙手「ペア碁」（1月27日）——12
第5回　囲碁をオリンピックへ（2月3日）——14
第6回　愛と脳（2月10日）——16
第7回　海洋資源大国（2月17日）——18
第8回　ウォーキング・ミーティング（2月24日）——20
第9回　1%フォー・アーツ（3月3日）——22
第10回　2つのステンドグラス（3月10日）——24
第11回　地下空間に放送局を（3月31日）——26
第12回　大切なふるさと、東北（4月7日）——28
第13回　東京でふるさとを食べる（4月14日）——30
第14回　芸術文化と科学技術（4月21日）——32
第15回　週末、北京にて（4月28日）——34
第16回　理科離れ（5月12日）——36
第17回　人のためは自分のため（5月19日）——38
第18回　ハッピーレストラン（5月26日）——40
第19回　日本のメニューは面白い（6月2日）——42
第20回　日本発、世界へ（6月9日）——44
第21回　大豆と日本（6月16日）——46
第22回　大切な言葉（6月23日）——48
第23回　尊敬される日本へ（6月30日）——50
連載を終えて　滝　久雄——53

ぐるなび会長　滝　久雄

自己紹介代わりに昔話をお許しいただきたい。私は、大学卒業後に勤めた会社を4年目に退職した。将来のベンチャーを目指しての決断だった。しばらく浪人時代を過ごしたが、最初にしたことは、楽をして成功できる方法を研究することであった。

起業する前に、最小の労力で大きな成果をものにする方法を見つけてやろうと、その事例となる人物はいないかと探した。同じ目標を達成するなら、スリムに無駄なく仕事をしたほうがいい、そのためにはどうすればいいのかを追求したのだ。

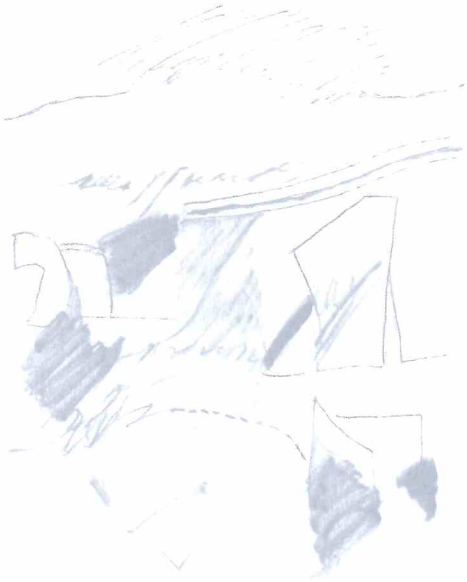
豊田佐吉の資料を展示する部屋を見る機会があった。20代で豊田式木製人力織機を発明し、50代にG型自動織機を完成させるのだが、年月を重ねるほどすさまじい進化を遂げていくさまを目の当たりにした。楽などという言葉は感じられず、その対極にあるようにすら思えた。そして、そこに残された文献の中で、ゲーテは「人生に成功する秘訣は自分が好む仕事をするのではなく、自分のやっている仕事を好きになることである」と、エジソンは「天才とは1%のひらめきと99%の汗のたまものである」と教えていた。

あすへの話題

楽をして成功する方法

楽をして成功する方法を探す私の旅に終止符が打たれた。3、4年間は続けたその研究に成果はなく、30歳の私は自らの不明を恥じた。失敗も、無駄と思える頑張りも必要なのだ。誰もが自らの目標と真摯に向き合い苦労を重ね、成功にも満足せずに次なる目標を模索している。それを納得できたことが成果といえるかもしれない。

あれから40年が過ぎた。当時の体験は、私の仕事の仕方の原点となっている。新しい年の始まりに、今年も労を惜しまず新しい何かに挑戦したいと思っている。



ぐるなび会長　滝　久雄

あすへの話題

19歳、理工学部の2年生のときに、人間について考えることを趣味にしようと決めた。人それぞれに好き嫌いがあるのはなぜだろう。誰もがミロのビーナスを美しいと思うのはどうしてだろう。いま思えばその本質は「人間とは何か」という途方もないテーマだが、私がしたことは、哲学書を読み漁るわけでもなく、暇なときに人間について考えるという程度のことだった。

それでも日々考えていると何かを感じ、気づくものである。「人間とはこういうものである」という仮説を立て、人間の本質が見えたような気になるのだ。しかし、思いつきの仮説は何かの拍子にあっさりと崩れてしまう。また別の仮説を立て、またもや砕かれる。浜辺で砂城をつくっては波に崩される。そのような繰り返しだった。

趣味は「人間を考える」

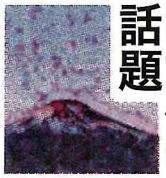
「貢献心は人間の本能である」。その仮説は、社会に出て2年目、人が持つ使命感について考えているときに築いた。これがそれまでの仮説と違ってなかなか崩れない。10年過ぎても20年過ぎても立ち続けている。趣味は一歩前進した。哲学の道にいる友人たちに哲学の基礎を聞き、議論も重ねた。それを数年続けた頃に1冊の本も出版できた。

その本が新たな前進をもたらす。カオス理論の第一人者として知られる合原一幸博士の目に触れる機会を得、「貢献心に基づく行為は義務というよりむしろ権利という考えは、目からうろこ」という、大変うれしい手紙までいただいた。それが縁で、東京大学生産技術研究所の脳科学研究の顧問研究員として昨年3月まで研究に参加させていただくことになった。

趣味は継続中。50年過ぎても人間の本質は悟れないが、人間はやっぱり面白い。

ぐるなび会長　滝　久雄

あすへの話題



今年も新成人の人口は過去最少を更新した。世界でも速いペースで進む日本の少子高齢化が深刻な問題として取り上げられるようになって久しい。

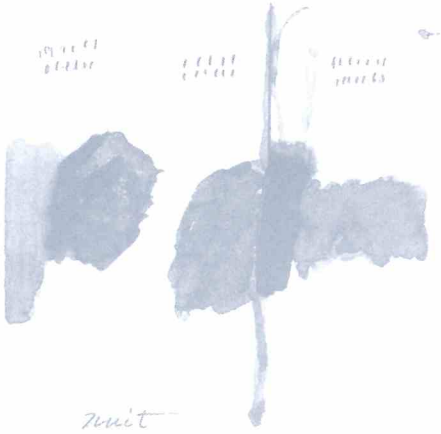
私は、少子化の解消は必要として、この事態を悲観するだけでなく前向きに捉えたい。日本には世界2位のGDPを支えてきた科学や技術の蓄積がある。その力で「高齢化先進国」を目指してはどうだろう。やがて少子高齢化は世界共通の課題になるはずだ。そのとき日本は手本となり、理想的な高齢化社会を実現した先進国としてさまざまな知恵やノウハウを提供するのだ。

テーマに〝ぼけない高齢化〟が想定される。重要なヒントをくれるのが芸術家だ。私は理事長を務める公益財団法人日本交通文化協会で、パブリック・アートの仕事を通じ多くの芸術家とお付き合いしてきたが、皆さん、年齢を重ねても創作を続けている。尊敬する日本画家・片岡球子先生は、100歳を数えても後進を指導し、創作意欲を燃やし続けた。

芸術家が年老いても活躍できるのはなぜだろう。美のイデアを追求して創造を続けるから芸術家の脳は衰えにくいのではないか。新しい物事に強い興味を持って脳を働かせていれば何歳になっても脳は進化するのではないか。私はそう考察する。

常に創造し続けることだと思う。それは、芸術家ではない私たちにもできる。たとえば、向上心を持って囲碁を打つのもいいだろうし、ビジネスでも新しい領域に挑んでいれば脳はフル回転で働くだろう。

パブロ・ピカソは「明日描く絵がいちばん素晴らしい」と言った。明日打つ碁が、創るビジネスモデルがいちばん素晴らしい。いつもそういう気持ちでいたいと思う。



高齢化社会と芸術家

ぐるなび会長　滝　久雄

囲碁を始めたのは小学生のとき。紙やベニヤ板で碁石と碁盤を作って遊んだ。学生時代は囲碁部、そして今でもインターネット上で毎晩のように打っている。

日本の囲碁人口は1980年代前半には1000万を超え、まさに国民的娯楽だった。が、その後は右肩下がり。囲碁に愛着が強かった私には見過ごすことができず、囲碁人気回復の妙手はないかと思案した。

ブームをつくるのはいつも女性たちだ。私は「囲碁と女性」を切り口に考えた。そして創案したのが囲碁のミックスダブルス「ペア碁」。基本的なルールはこうだ。

あすへの話題

対局者は男女ペア同士とし、一つの碁盤で4人が交互に打っていく。初級者の女性でも参加しやすく、なにより女性が入ることで華やかになるのがいい。ペアの組み方で技量の差を均(なら)すことができ、ホームパーティーでの親子ペアの対局など社交の場にももってこいだ。国の元首同士がファーストレディーとペアを組む対局だってある。私はゲームを構想しながらそんなシーンもイメージした。

対局中のパートナー同士の会話は禁止である。相手だけでなく自分のパートナーがどんな狙いで打ったのかも読まなければならず、それが、1対1では想像できないスリリングな展開をもたらす。「ペア碁」の感想をあるプロ棋士は、「勝つと嬉(うれ)しさ二倍、負けても悔しさ半分」と表現したが、見事に言い当てていると思う。

今週の土曜日は、公益財団法人日本ペア碁協会が主催する「プロ棋士ペア碁選手権」の決勝戦。日本の囲碁界を代表するプロ棋士男女16組による最高峰のペア戦、私は大会役員を務めるが、囲碁ファンの一人としても見逃せない一局である。

囲碁人気への妙手「ペア碁」

ぐるなび会長　滝　久雄

あすへの話題

サッカーのアジアカップで日本代表が優勝した。準決勝の韓国戦は日本時間で深夜1時過ぎの決着になったが、瞬間最高視聴率が40％に届いたというからすごい。

サッカーが「サムライブルー」なら、囲碁は「知恵の和ジャパン」。私が愛する囲碁もスポーツなのである。日本棋院、関西棋院、日本ペア碁協会が合流して設立した全日本囲碁連合は、昨年、日本オリンピック委員会の承認団体になった。そして、アジアオリンピック評議会が主催する第16回アジア競技大会に、10人の棋士を日本代表選手として送り出した。「アジア大会、囲碁でメダルを」、「囲碁プロ、スポーツ大会へ」といった新聞の見出しをご記憶の囲碁ファンは少なくないと思う。

囲碁がオリンピックの競技になる。それは私の長年の夢だった。1997年には囲碁を愛する有志によって「囲碁のオリンピック正式競技化を目指す世話人会」を結成し、「囲碁をオリンピックの正式競技に」という広告も打った。オリンピック競技になれば若い囲碁ファンが増え、囲碁文化を守り育てることにもなる。その強い思いからの取り組みだった。

当時の目標は2008年北京オリンピック。そこでは叶わなかったが、2年後、アジアのオリンピックといえる大会で実現できたのだ。私が創案した囲碁のミックスダブルス「ペア碁」も男女団体と並んで正式種目に採用された。

世界各国では囲碁はチェスなどと並ぶマインドスポーツとされ、囲碁の発祥地・中国でも中国棋院は国家体育総局に属している。オリンピックでサッカーやマラソン、柔道などと同じく囲碁のメダル争いに注目が集まる。その日を楽しみに待ちたい。

囲碁をオリンピックへ

ぐるなび会長　滝　久雄

あすへの話題

若い頃からの信条の一つが、「やらなければならないことは、やりたいことにしよう」だ。どうせやるなら前向きにやろうと決めたのだが、徹底するうちに嫌いな仕事がなくなっていったから成果はあった。そして、やがて「仕事が趣味」を自認するようにさえなったが、何年もやりたいことを続けていれば当然かもしれない。

うまくいったことは人にもすすめたくなる。紹介したいのは、「すべての仕事をやりたいことにする習慣をもてば、仕事の質が上がるし、面白くなる。そうなれば意欲も高まる」という効率のいい仕事術。が、「嫌な仕事はどうしても嫌」という反応にあうと、「嫌な仕事は天が自分を鍛えるために与えた試練だと思えばいい」と教訓めいて本意がどうも伝わりにくい。

愛と脳

もやもやとした思いを脳科学者・松本元さんが晴らしてくれた。松本さんは、脳の原理で働く脳型コンピュータ開発の先駆者。著書『愛は脳を活性化する』にある「脳に快情報としてインプットされれば、脳内活性が上がり学習効果が高まる」という記述に目がとまった。「快情報」とは脳が好きと受け取る刺激のことで、脳が快と認めれば脳に効率よく仕事をこなす回路が作られるという。

我が意を得たり、自分の信条に脳科学からのお墨付きをちょうだいした思いだった。やりたいことは脳にとって快情報だ。やりたいことには脳はすいすい働く、やりたいことが脳を効率よく成長させるのだ。

バレンタインデーが近づき、店先にハートの柄があふれて街には愛情が増量されたようだ。けっこうなことである。松本さんは「愛は脳を活性化し、意欲を向上させて脳を育てる」とも書き遺（のこ）している。

ぐるなび会長　滝　久雄

知人に誘われてふぐ料理屋へ出かけた。その店の80歳を超えたという親方の仕事はもはや芸術の域で、出された皿に見惚れると同時に、ふぐという魚をこれほどまでにおいしく美しく調理する技術、それを舌だけでなく目でも味わう食文化は日本の大切な財産だと改めて感じ入った。

この素晴らしい文化には1万年以上の歴史がある。私たちの祖先はすでに縄文時代に動物の骨で釣り針を作って漁をし、その時代の貝塚からはふぐの骨も発見されている。四方をぐるりと海に囲まれた島国だから当然のことなのだろう。

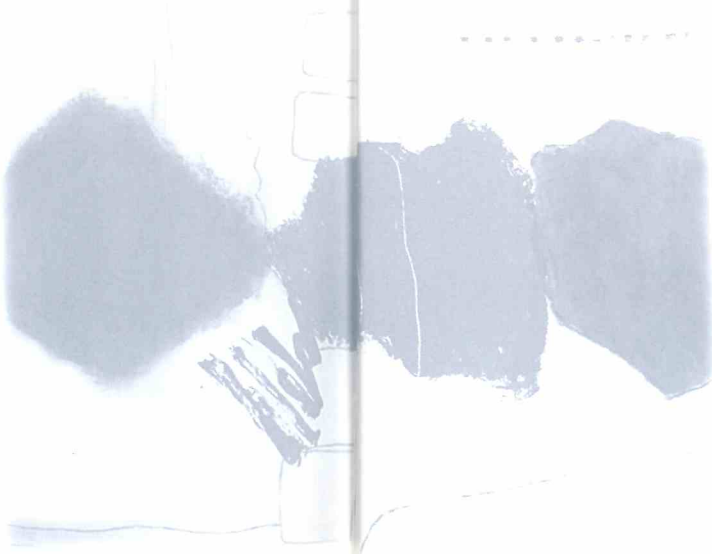
あすへの話題

調べてみると、日本の海岸線は約3万キロメートルあり世界第6位、中国の2倍にも及ぶ。この海からの恵みが日本に一層大きな恵みをもたらしてくれる。東京工業大学で開かれた「イノベーションによる食の未来創成に向けて」と題する講演会に参加してその思いを強くした。

登壇された前ユネスコ事務局長の松浦晃一郎さんが、世界190カ国を訪問した経験などもまじえながら話されたところによると、世界では日本食がブームで、海外の日本食レストランは欧米を中心に約3万軒もある。そこでの人気メニューは、昔のすきやき、鉄板焼きから、寿司、刺し身へつまり魚料理へと変わっているそうだ。

同講演会では他の講師から、冷凍技術は日本が世界の先頭にいるとも聴いた。豊かな海の幸と最先端の冷凍技術、魚介を中心に世界的な日本食人気。お隣の大国、経済成長著しい中国でも富裕層を中心に日本の品質の高い農水産物や食文化への関心は高まる一方だ。レアメタルなど鉱物資源もそうだが、食の分野でも日本の海洋資源大国としてのポテンシャルは期待できる。

海洋資源大国



ぐるなび会長　滝　久雄

あすへの話題

多いときで週に3回、少なくとも週に1回は皇居周辺に自分で決めた1周約7キロのコースを70分ほどかけて早歩きする。歩き始めて16年以上になる。

健康のために毎日の習慣にできる軽い運動をと思い、昼間の時間がとれる時に歩くことにしたのだ。これを三日坊主にしないために考えたのが、自分の趣味をプラスして楽しく歩くこと。私の趣味の一つは人と話すことだ。特に志を高く、目的意識を持つ若い人たちと話すのは楽しい。よし、若手の社員を誘って歩こう、と考えた。

歩きながら交わす会話は仕事の話題が多くなる。ちょっとしたミーティングの様相。そうなってまもなく、私と直接話したい社員の中には、会議室ではなくこの歩く時間を利用しようという者も現れるようになり、私のスケジュールには「ウォーキング・ミーティング」という名称が書き込まれるようになった。オフィシャルな会議として定着したのである。

雨の日も休まない。オフィスのある日比谷から銀座へと広がる地下道を利用したコースを約1時間歩くことにしている。

続けるうちに気づいたことがある。歩いていると頭が冴え、アイデアを思いつきやすい。第三者に邪魔されないのも理由かもしれない。集中できるのだ。

オープンな空間はリラックスさせるのか、社員も会議室とは違ったのびのびとした表情を見せる。自動車の騒音もほどよく、会話の内容は隣を歩く人にしか聞こえず、セキュリティーを気にする話もできる。

運動不足を解消し、アイデアも生まれ、コミュニケーションも育つウォーキング・ミーティング。あとひと月もすると千鳥ケ淵の桜が歩く楽しみに加わる。

ウォーキング・ミーティング

ぐるなび会長　滝　久雄

あすへの話題

パブリックアートをテーマとする座談会に出席した。席上、出席者のお一人、世田谷美術館館長で美術評論家の酒井忠康さんから、イギリスで、美術評論家ハーバート・リードの墓参りをしてきたという話を伺った。リードは私にとっても特別な存在だ。私は理事長を務めている公益財団法人日本交通文化協会で約40年前からパブリックアートに取り組んでいるが、事業の指標としているのがリードの著書『芸術の意味』に書かれた次の言葉である。

『今、我々に欠けているのは芸術家ではない。大衆である。芸術に意識を持つ大衆ではない。無意識的に芸術的な大衆である』

人々が普段の生活の中で芸術に親しむことにより社会のモラルが高まる。その環境の創出にパブリックアートの意義があり価値があるのだという思いで、これまで470点以上の作品を全国の駅や空港、学校などに設置してきた。

日本のパブリックアートへの認識は熟しているとはいい難い。「1%フォー・アーツ」との向き合い方をみてもそう思う。公共事業費の1%に相当する予算を芸術・文化に支出するというこのシステムは、欧米をはじめ各国で導入されているが、我が国では導入への意欲は残念ながらまだ小さい。

日本の公共事業費の1%にあたる予算が芸術、文化にあてられるなら、芸術家たちは今以上に多くのすぐれた作品を生み出せるだろう。それらが公共の空間で人々に無意識に親しまれ、社会全体の精神的な豊かさとなっていく。

芸術・文化の面でも世界から尊敬される日本であり、日本人であるためにも、リードの言葉の意味は重要だ。「1%フォー・アーツ」の一刻も早い実現を願う。

ぐるなび会長　滝　久雄

あすへの話題

新幹線のニュースが続く。はやぶさが運転を始め、明後日は九州新幹線が全線開業、新大阪～鹿児島中央間が3時間台に突入する。速さと快適さが旅行する楽しみを広げ、多くの利用客で賑わうことだろう。

私も今週の木曜日（今日！）はJR博多駅を訪ねる。九州新幹線全線開業を記念したパブリックアートの制作を公益財団法人日本交通文化協会が担当したご縁で、その除幕式に参列させていただくことになった。

設置されるのは博多駅4階の新幹線と在来線の乗り換え通路。高さ2・5㍍、幅7・5㍍の大きなステンドグラスで、タイトルは『海の向こうから』。原画と監修は文化功労者の野見山暁治さんによる。

福岡県出身の画伯が原画に表現したのは自らの故郷であり、祖先から受け継がれる時の流れ。そこに描かれた遙かなる大陸から渡ってきた風に波立つ青い海が、ドイツ製アンティークグラスを素材に、ステンドグラスならではの広がりと奥行きで再現できたと思う。駅では珍しく自然光を利用できたことも特筆したい。季節によって、一日の中でも時間帯によって異なる表情を見せてくれるはずだ。

九州新幹線との縁はもう一つ。7年前の部分開業時に、南の起点、鹿児島中央駅の新幹線コンコースに設置された大型ステンドグラス『桜島』（原画・田崎廣助氏）を制作させていただいた。これも自然光による貴重な作品で、日差しを浴びて床面につくる美しい映り込みも喜ばれている。

これらの作品が人々の旅の思い出の一つになれるなら、作家はもちろん裏方としてパブリックアートに携わる私たちにも大きな励みとなる。駅のアートを旅の楽しみに加えていただければうれしい。

2つのステンドグラス

ぐるなび会長　滝　久雄

あすへの話題

このたびの大震災で被災された方々へ心よりお見舞い申し上げます。

そのとき私はビルの33階で会議に出席していた。そして直後に、誰もがそうであったように、携帯電話がつながらない状況を経験し、改めて非常時の情報伝達のことを思った。どこにいるかということが、得られる情報量やその後の行動に影響を与える。そこが地下鉄の車内だったらと考えた。

２００３年２月に韓国の大邱広域市で起こった地下鉄駅構内の火災をご記憶の方もいるだろう。通信網はあったが適切な指示が速やかに伝達されず、火災現場に後から入線した列車の乗客が逃げ遅れて多数の被害者が出た。情報伝達手段が機能していれば被害は違っていたはずだ。

地下空間には制約があり情報網は限られる。日本の地下鉄道は７３０キロメートル以上、年間の利用者総数は約52億人で、地下街を含めて地下空間はいまや都市の一部だ。予期せぬ緊急時、どちらに避難すべきか、とどまるべきか。地下空間を利用している人に地上にいる場合と同様の情報内容、情報量をリアルタイムに伝達することはとても重要なことだ。

この夏の本格的な地デジ化によって、通信と放送が融合して進化したマルチメディアが可能になる。これを活用した地下空間放送局を私は構想する。アクセスダウンがない放送を活用することで、地下空間のセーフティーシステムになれると思う。

建築家の清家清先生が、「地下街や地下鉄にも、万一の災害時に備えた信頼できる情報手段が必要ですね」と話されるのを聞いたことが、地下空間放送局構想へつながった。あれからもう30年以上が過ぎた。実現を期待したい。

地下空間に放送局を

ぐるなび会長　滝　久雄

あすへの話題

私のふるさとは、生まれた東京や小学生の頃に疎開した香川などいくつかある。私は、誰もが三つの種類のふるさとをもっていると思う。一つは出身地、自分が生まれ育ったふるさと。二つ目は縁を持つふるさと。妻や夫の故郷だったり、転勤地だったり、友だちが暮らす場所だったり。そして、三つ目は心惹かれるふるさと。旅行して好きになった場所も、訪ねてみたいと憧れている土地もふるさとだといってもいい。

ふるさとのことを改めて考えたのは、東日本大地震の被災地への支援のことを思ったからだ。被災地では国内はもちろん世界各国から人的支援や物資が届けられ、復旧が進む。しかし、千年に一度といわれる大震災の爪あとはあまりにも深く、復興までの道のりが平坦でないことは誰もが思うところだろう。その道のりも短いものではない。だから、みんなの応援する気持ちが半年や一年で風化してはならない。文字通りオールジャパンで持続的な取り組みが不可欠である。

故郷が被災し、その故郷を離れて暮らす人は日本や世界の各地にたくさんいるだろう。彼らはふるさとを案じ、ふるさとの一日も早い復興を心から願い、ほぼ永遠ともいえる継続的な応援を続けるはずだ。

私たちも同じでありたい。そして、東北をふるさととして応援するのは東北で生まれた人だけではないとも思う。私は仙台駅のステンドグラスの制作など親しいおつきあいが多くある。海の幸、山の幸、大好きな食べ物も数えきれない。私にも東北は大切なふるさとだ。ふるさとを思う気持ちに終わりはない。ふるさとを愛する気持ちは、復興へ向かって日本全部で進むための大きくて持続する力になると私は信じる。

大切なふるさと、東北

ぐるなび会長　滝　久雄

あすへの話題

「地産他消」の取り組みを始めて約2年になる。「地産他消」は造語だ。農産物などを生産したその地元で消費する「地産地消」に対し、他の地域で消費するという意味で考えた。東京でふるさとを食べよう、といえばわかりやすいかもしれない。東京をはじめとする都市部などで消費することにより、各産地における食材等の需要が増え、それが産地に安定した生産拡大をもたらす。日本の喫緊の課題といえる農漁業の産業化の一助になりたい、そんな思いをこめた仕事である。

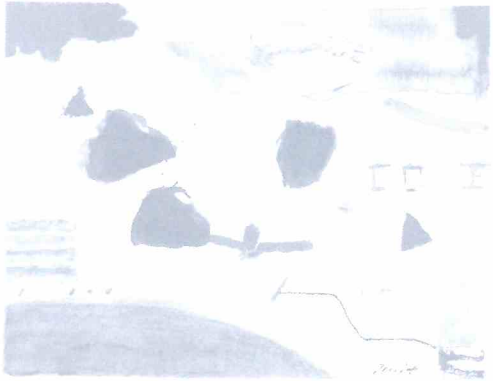
日本には世界が認めるすぐれた食文化がある。それは各地で作られる質の高い食材なしには成り立たない。食材を守ることは日本の食文化を守り育てることにもつながるのだから「地産他消」の意義は大きい。

取り組みの一つとして

東京でふるさとを食べる

現在、全国1750の市町村の食材情報を1万人以上のシェフにつなぐコミュニティ作りを進めている。各市町村がおすすめする食材情報を提供するのだが、シェフの皆さんはほぼ全員が、そのデータの中から最初に自分の故郷の食材をチェックする。さらに、その食材の話をきっかけに、スタッフとシェフの間で、ふるさとはどんなところ……、名物の郷土料理は……、故郷の食材でメニューを開発したい……そんな話に花が咲くという。

被災地の農漁業が受けたダメージは大きい。シェフたちが故郷を離れても常にふるさとを思う気持ちは、一日も早い復興を実現する強い力になるだろう。もちろん都市部の消費者の果たす役割が大きいことも忘れてはならない。そして、食の分野を本業とするものの使命として、私たちも微力でもがんばり続けなくてはならない。



ぐるなび会長　滝　久雄

あすへの話題

中国最高峰の理工系総合大学・清華大学が百周年を迎える。同校とはいくつかの縁があるが、その始まりは、中国トップの美大・中央工芸美術学院と合併して清華大学美術学院が誕生した12年前。私が理事長を務める公益財団法人日本交通文化協会では日本及び海外の美大生に奨学金を給付する「国際瀧冨士美術賞」を31年前から行っており、その事業による中央工芸美術学院との親しい交流から式典に参列した。

両校の合流時には、「アート&サイエンス」というテーマが掲げられた。科学技術に偏重することなく芸術文化も重ね合わせた大学教育によって、人格的にもよりすぐれたリーダーを育成していく。そのような強い信念があったのだと私は理解した。

後年、そのプロジェクトの中心的な一人、清華大学の副学長も務めた何建坤先生を静岡県にある日本交通文化協会の工房に迎えた。大型のパブリックアート作品を中心に制作している工房は、とくに陶板レリーフに独自の技術の蓄積がある。陶板に使う釉薬はガラスだ。ガラスにセレンを混ぜて窯で焼くと赤い陶板になり、コバルトが入ると緑になる。各種釉薬の調合や温度管理等によって5000種類もの色を再現できるのだ。設立から30年が過ぎた工房の見学を終えた先生からは「我々よりも20年以上も早く、本格的な芸術と科学技術の融合を実現していますね」という印象深い言葉をいただいた。

工房が保有する技術や設備を広く芸術界の役に立てようという取り組みもある。美大等への開放はその一つで、昨秋は東京芸術大学大学院が同工房で実習ゼミを実施した。今後も芸術文化と科学技術が融合するアトリエとして広く提供していきたい。

芸術文化と科学技術

ぐるなび会長　滝　久雄

あすへの話題

先の週末、清華大学の建校１００周年大会に出席した。胡錦濤、呉邦国、習近平……北京の人民大会堂に並ぶ顔ぶれに、清華大学が輩出した人材の質の高さ、層の厚さを改めてみせつけられる思いだった。

清華大学には、日本の社会や歴史、文化教育、経済などの研究を目的にする日本研究センターがある。近代化のプロセスなども重点的テーマで、日本の明治維新についても研究しているという。

一昨年、同センターで講演をする機会をいただいた。講演後にお世話になった通訳の方と雑談するなかで、彼が吉田松陰の研究者であることを知った。流暢（りゅうちょう）な日本語を淡々とつかう彼が、吉田松陰の話題になると語り口調に熱を帯びる様子が印象に残っている。

振り返ると私が初めて中国を訪ねてから30年以上が経（た）つ。第一歩は平山郁夫画伯のお供をして訪れた北京だった。当時の北京の通りはどこへいっても自転車ばかりで、自動車を見ることはなかった。

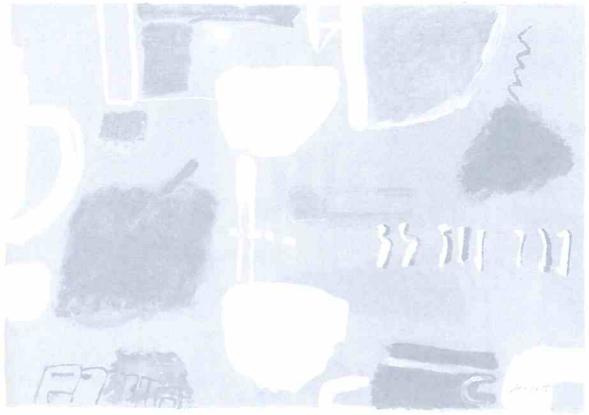
「経済ばかりではね」

そんな北京の街の様子を眺めながら、画伯は静かに語りかけてくださった。

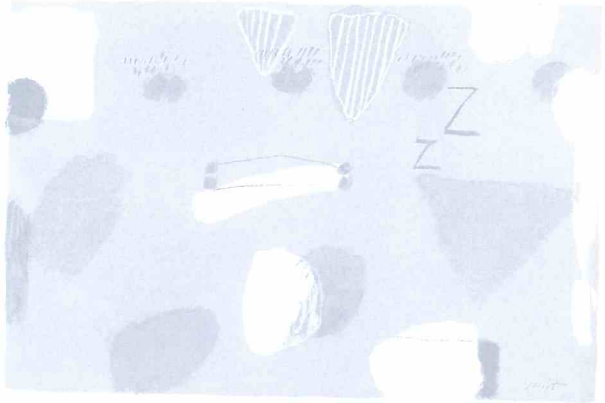
「私たちは尊敬される日本人であることを目指すべきではないでしょうか」

当時の日本は高度経済成長期のまっただ中。経済大国としての地位を着々と固める、そんな時代だった。

国を動かすリーダー教育のために、日本の明治の教育手法を研究する清華大学。文化財赤十字活動に取り組み、世界で尊敬される代表的な日本人になった平山画伯。日本の教育のあり方を見直すための何かしらの示唆があるのではないだろうか……。そんなことを思う北京滞在となった。



週末、北京にて



ぐるなび会長　滝　久雄

あすへの話題

自動車、家電、携帯電話……、日本のものづくりは世界一だ。もっとよく、もっと便利にというこだわりが日本人にはあり、それは遺伝子に刷り込まれたものではないかとさえ思えてくる。もちろん教育の力も大きい。江戸時代から寺子屋というシステムがあり、明治の開化期にダイナミックな社会の変化を遂げる土台となった。そして、100年後の科学技術立国へと続いた。

その日本で、子どもたちの理科離れがいわれるようになって久しい。大学入試制度など原因はさまざまいわれている。しかし、その解決策となるとどうだろう。

私は民間の力を活用すべきだと考える。子どもが理科を好きになるか嫌いになるかには、小学校、中学校で教える先生の影響も大きく、自ら理科にやりがいを感じている人が教えることが大切だ。日本には世界に誇るべきものづくりの企業が多くある。それらの企業が、若いエンジニアを理科の先生として派遣するシステムができないだろうか。ものづくりの第一線で活躍しているエンジニアによる生きた授業が、子どもたちの興味を大いに刺激することは想像するに難くない。

これには下敷きがある。以前にあるシンポジウムで、ノーベル物理学賞を受賞されている小柴昌俊氏が「理科をやっている大学院生に自分の出身中学で、ある期間教えさせ、その分、奨学金の返還を免除してやればいい。カナダなどではそうやっており、子供の理科離れなんてない」と語るのを聞いて考えた。

教育には時間がかかり、50年、100年という単位で考えなくてはならない。日本の遠くない未来のために、理科離れの解消を急ぐべきだと思う。

ぐるなび会長　滝　久雄

あすへの話題

カンボジアで地雷除去のボランティアに取り組んだ知人がいる。彼が経営する会社には地雷除去に応用できる技術があり、地雷の探査機を無償で開発した。

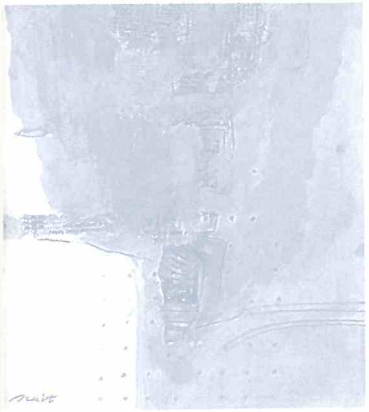
地雷を取り除いた校庭には、陽が昇ってから沈むまで子どもたちの笑顔が絶えなかった。その光景を前に自身が幸せな気持ちで満たされているのに気づいたとき、彼は実感したという。子どもたちのためではなかった、自分のための仕事だったのだと。

活動に参加する若者も多くいたが、ほとんどの意識は「社会貢献のための慈善活動」だった。彼はあるときから若者たちに「カンボジアの人々のためではなく自分のための活動だ。自分の心のなかに在る、他者の役に立ちたいという本能的な欲求を満足させるためにやるのだ」と話すようになったそうだ。

現場にアクシデントはつきもので、そんなときに慈善活動だという意識でいる人の多くは、それが小さい事故でも、やめて帰ってしまった。しかし、他者のためにやってあげるのではなく、自分のためにやるのだと意識できた人は動じない。そもそも作業もていねいで事故も起こりにくいという。自分のためとなれば誰もがよりよい成果を求めるし、喜ばれる結果を出すことで自分自身が満足できるのだから仕事の質も高くなる。

ゴールデンウイーク、多くのボランティアが駆けつけた東日本大震災の被災地は、今も支援を必要としている。休暇等を利用する個人の活動に加え、組織的に行う息の長い支援も望まれる。自分のためにやるのだと意識して行う活動が、企業ならば本業で取り組む支援がますます大切になると思う。本業であれば継続できるし、どんな困難に直面しても乗り越えていける。

人のための は自分のため



ぐるなび会長　滝　久雄

あすへの話題

群馬県吾妻郡で移動レストランを開いた。福島県南相馬市から避難する被災者の方々に、外食の気分でひとときでも日々の苦労を忘れていただきたいと実施した3日間の炊き出しで、「ハッピーレストラン」と名付けた。賛同してくれたシェフたちがボランティアで料理長を務め、本格的な創作和食やフランス料理を出した。

「まるで竜宮城にいるような気分です」

会場でそんな声が聞かれたという。外食は、暮らしの中のささやかではあるが頻度の高い非日常的な楽しみだ。日常からほど遠い苦難の日々を強いられている方々を少しでも癒せたならうれしい。そして、ささやかな楽しみの感想が「竜宮城」を持ち出すほどのことになった現実が重い。

閉店の翌日から2日間、同じ会場に「はれのひ食堂」がオープンした。南相馬の女性たちが、避難生活でお世話になっている地域の人たちに少しでもお返しがしたいという気持ちで自分たちの郷土料理に腕をふるった。ほっきめし、さんまのぽっぽ焼き、どぶ汁……海辺の町に伝わる料理は山間の町に暮らす人たちに喜ばれ、南相馬の女性たちが地元の人にレシピを教える姿もみられたという。

作る人も食べる人も励まし合った5日間。「自分たちが元気をもらった」と振り返るスタッフのリポートを聞き、食のもつ力についても改めて思った。おいしさは人を元気にする、おいしさは人と人をつなぐ。

次の「ハッピーレストラン」も準備中。キッチンカーを移動し、老舗料理店の皆さんが駆けつけてくれる予定だ。避難生活が終わり、それぞれのふるさとで外食を楽しむあたりまえの毎日に一日も早く戻れることを願いつつ、不定期ながら続けたい。

ハッピーレストラン

ぐるなび会長　滝　久雄

あすへの話題

絶品も名人技も、旬も限定も、噂も幻も、ご当地も珍味も、大盛りも……外食のメニューを取り上げるテレビのグルメ番組が花盛りだ。それらを見るたびに、日本のメニューの面白さを再確認させられる。

わが国の飲食店数は70万店以上、メニューの人気ランキングを作ってみると見事なロングテールになる。この尻尾の長さが日本の外食文化の懐の深さだ。日本に世界一といわれる食文化があるのも、多様な飲食店が元気に営業しているからだと思う。

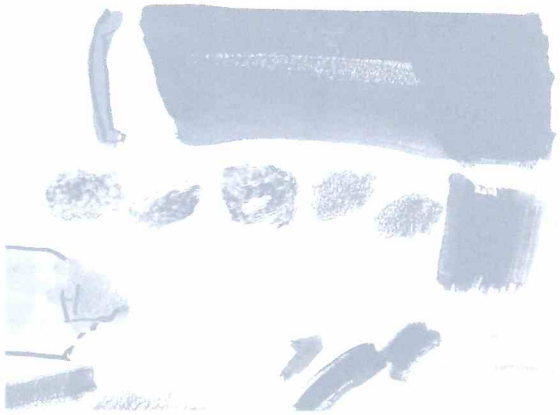
日本での外食は海外からの観光客にも人気が高く、訪日の楽しみは食事がトップで、ショッピング、温泉などを引き離している。観光庁は年間の訪日外客数3000万人を目標に掲げるが、その達成のために外食は最重要コンテンツといえる。

日本のメニューは面白い

VISIT JAPAN大使に任命いただいて2年、震災で減った観光客をよび戻すために、海外へ日本の食の魅力と安全を積極的に紹介していきたい。

3月、最悪のニュースはソーシャルメディア等を通じて世界を駆け巡った。今度はそのメディアが回復の様子も周知させてくれるだろう。いま、世界は日本の復興の進展に注目している。ならば復興の早さで驚かせたいものだ。そのミラクルもまた日本への新たな興味となり、再び多くの観光客をよぶことにもなると思う。

さて、彼らが楽しみにする日本での食事だが、人気メニューは寿司、ラーメン、刺し身、うどん、天ぷらと続く。日本の各地にご当地ラーメンがあり、うどんはダシも麺も変わり、寿司や天ぷらには旬のタネが登場する。私たちをまるで飽きさせないのだ、その豊かさを知るほどに彼らが日本の熱烈なファンになることは容易に想像できる。



ぐるなび会長　滝　久雄

日本の食文化は世界一だ。それを可能にしているのは質の高い食材であり、歴史とともに培われてきた調理の技だと思う。

海外での評判もいい。欧米でのヘルシーな食生活への志向なども追い風となり、今では海外の日本食レストランは3万店以上といわれる。ただし、日本人の経営となるとその中の1割程度で、残りはアジアを中心とする外国の人たちのお店だ。

これは日本食が世界のスタンダードになったことを証明するものだと喜ぶべきことである。そう思うと同時に、多くの美味しいお店があることは認めたうえで、「本格的な日本料理はもっと繊細でじつに味わい深いものですよ」と声を大きくして言いたい思いにも駆られる。日本には醤油や味噌、酢、みりんなど伝統的な調味料、

あすへの話題

日本発、世界へ

発酵食品があるし、昆布や鰹節、煮干しなどの「だし」の文化がある。それらは日本人の舌がもつ繊細な味覚によって使いこなされている。

ブームとなった海外の日本食レストランで、日本の食に触れて魅力を感じた人たちは、次はもっと本物を求めることだろう。その欲求に応えるためには正統の味や技が必要となるはずだ。日本の食文化の知識を修め、調理技術を身につけた人材を育成する教育システムの確立が急がれる。ベテランの料理長たちが先生となり、後進を指導する大学院大学等も一考に価するのではないだろうか。

食材や調味料、そして調理技術など日本の食文化が各国の料理と出合って、たとえば新しいフランス料理、イタリア料理などを創造することにつながるかもしれない。そのとき、本家の日本料理は一段とブランドアップしていくことだろう。

ぐるなび会長　滝　久雄

あすへの話題

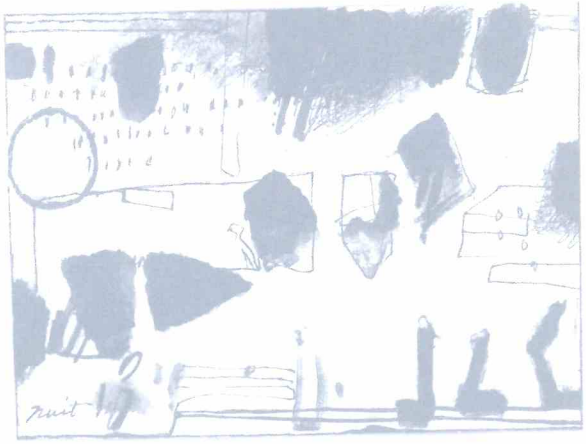
ご飯に納豆をのせ毎朝のように食べている。好きな納豆も、その納豆をよく混ぜてから加えた醤油も、添えられる味噌汁も、その具になる豆腐も、全部が大豆を主原料にした食品だ。私の毎朝のメニューはどこにでもある日本の食卓の定番だ。だからこそ、大豆は日本人の生活に欠くことのできない大切な食品の一つだといえる。

その大豆が今では多くが遺伝子組み換えによるものだという話を聞いた。日本で消費されている大豆は年間約400万トンで国産大豆の自給率は約5%。残りは輸入にたよっており、輸入先は70%以上が米国。そして、米国で生産されている大豆の90%以上が遺伝子組み換えのものだという。

米国では農薬と組み合わせた品種開発も進んでいるそうだ。ある品種の大豆だけには影響を与えることなく、他の植物は枯らす除草剤を開発する。そのような特許を取得した除草剤とそれに耐性を持つ大豆の種をセットにして販売するというビジネスモデルもすでに現実のものになっている。研究を進めているのは米国だけではない。たとえば中国でも遺伝子組み換えにより、害虫に強いイネが作られているという。

予測では世界の人口は遠くない将来に80億、90億を超えるとされ、それは食料問題をますます深刻なものにしていくだろう。トレーサビリティや農薬の管理、土地の改良、農産物等の検査、冷凍貯蔵なども含め、質でも量でも食の安心につながる農漁業の産業化へ向けた取り組みが一層加速することを願い、微力ではあるがその一助になりたいと思う。

大豆の実情を具体的に知り、いつものご飯と味噌汁の有り難さが増した。



ぐるなび会長　滝　久雄

あすへの話題

心を動かされるいくつもの言葉と出合ってきた。それらを忘れたくなくて、紙片に書き留めて手帳に挟むことが習慣になった。50年近く持ち歩く言葉もある。

「人は後世に対しては義務こそあれ権利はない。また前世に対しては権利こそあれ義務はない」

20代の半ばに出合った言葉だ。当時の私は、夜眠る前になるときまって無常観に襲われていた。始まったのは中学生の頃で、友人の兄がガンを告知され、自らの死と向き合う様を目の当たりにしたときからだった。「後世に対して……」という言葉は私に使命感をもたらした。自分にとっての後世、すなわち自分が影響を及ぼす相手を守ることが私の使命であると、そう思えたときに長年の無常観が消えていた。

大切な言葉

「成果＝能力×意欲×プラス思考」

この言葉との出合いはベンチャーを決心した頃だ。創業者の盛田昭夫氏が『学歴無用論』（文藝春秋社）で日本的な学歴主義や年功序列を批判するなど、人材に対する先進的な考え方で知られていたソニーは、昭和40年頃、求める人材を「成果を挙げる人」と定義した。それを表したのが前述の一行だ。

「能力」は基礎学力・表現力・個性・リーダーシップを、「意欲」は行動力・好奇心・探究心・ビジョンを指す。そして、「プラス思考」は常に物事を前向きにとらえていかなる状況も楽しむこと、それができる人がチャンスをつかむという。私はこの言葉をそのまま自らのベンチャー人生の基本として新しいビジネスに挑戦してきた。

若い頃はメモを読み返して多くの言葉を自分に言い聞かせた。今は後輩に伝えるために手帳から取り出すことが多くなった。

ぐるなび会長　滝　久雄

あすへの話題

年頭からの当欄、週に1回のペースにもようやく慣れかけた頃の衝撃だった。頭の中に整理していたネタ帳は3月11日を境に白紙に戻り、自身の価値観を再確認しながら執筆を続けた。

揺さ振られたのは日本という国もそうだったのだと思う。わが国は第2次世界大戦の後、経済に価値をおいてきた。その結果、経済大国と呼ばれ、私たちの生活は驚くほど豊かで安定したものになった。しかし、バブル経済の崩壊後は失われた10年、さらにリーマンショック後は失われた30年とさえいわれている。そんな現状を変えたいと願うのは私だけではないはずだ。

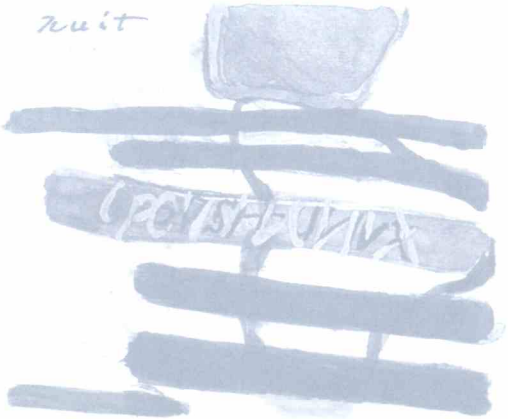
文化でも大国と呼ばれる日本であってほしい。これからも存在感のある日本であるためには、科学技術とともに文化も大切な要素になると思うのだ。

尊敬される日本へ

同じ第2次世界大戦の敗戦国となったドイツは、戦後まだ市民のエンゲル係数が相当高いにもかかわらずパブリックアートを復活させた。それを決める社会のコンセンサスがとれるのは、国の指導者も国民も、文化・芸術が人間社会に与える大切な価値を認めているからだろう。

日本にも古くからすぐれた文化がある。文化の融合も得意で、外から入ってきた文化を受け入れ、理解し、応用して新しい価値も創り出してきた。食文化をみても明白で、日本のフランス料理もイタリア料理も中華料理もレベルが高い。その能力が、この先の日本の新しい価値を生むはずだ。

いま、平山郁夫画伯と語った「尊敬される日本人でありたい」という言葉がより重さを増して思い出される。今年の3月が、世界から尊敬される日本へ向かう新しい起点となることを願う。



連載を終えて

いつもの年と同じように晴れやかな気持ちで新しい年を迎え、週に1回の連載は始まった。これまでに経験してきたことを記憶のなかから掘り起こしたり、目の前に起こる出来事を自分のうちに湧いてくる思いに照らし合わせたり、そんなふうにして一つずつ文章にしてみる。試行錯誤しながら、やがて10週が過ぎ、入稿のペースにようやく慣れてきた頃だった。

3月11日の午後、東北地方太平洋沖地震が起こってしまった。

千年に一度といわれる天変地異に、自分の価値観を改めて確かめられることになった。

自分は、明日へいったいどんな話題を提示できるのか。その日を境に、このコラムと向きあう思考もがらりと変わった。目の前に立ちふさがる逆境に反発しようとするバネの力が、筆をすすめさせてくれたように思う。

この半年が長く感じられるのは、3月以降の連続する非日常の事態のせいかもしれない。こうして連載を終え、それぞれの原稿を読みかえすと、そのときの心境を鮮明に思い出すことができる。

最後になったが貴重な機会をくださった日本経済新聞社に感謝します。

平成23年7月

滝　久雄

滝　久雄（たき　ひさお）

1963(昭和38)年
東京工業大学理工学部機械工学科卒業
三菱金属株式会社入社
1967(昭和42)年
三菱金属株式会社円満退社
財団法人日本交通文化協会・交通文化事業株式会社入社
1974(昭和49)年
財団法人日本交通文化協会 理事就任
1975(昭和50)年
株式会社NKB(旧名 交通文化事業株式会社)
代表取締役専務就任
1976(昭和51)年
財団法人日本交通文化協会 専務理事就任
1985(昭和60)年
株式会社NKB 代表取締役社長就任
1993(平成５)年
財団法人日本交通文化協会　理事長就任　現在に至る
1999(平成11)年
株式会社ぐるなび 代表取締役会長 兼 社長就任
2001(平成13)年
株式会社ぐるなび 代表取締役会長 兼 CEO就任
2004(平成16)年
株式会社ぐるなび 取締役会長就任
2009(平成21)年
財団法人ホモコントリビューエンス研究所 代表理事・会長就任 現在に至る
2010(平成22)年
株式会社ぐるなび 代表取締役会長就任
現在に至る
株式会社ぐるなび総研 代表取締役社長就任
現在に至る
東京商工会議所１号議員に選出される　現在に至る
2011(平成23)年
株式会社NKB 取締役会長就任　現在に至る

● 大学関連
2004(平成16)年
東京工業大学経営協議会委員
2005(平成17)年
東京工業大学大学院イノベーションマネジメント研究科客員教授
2008(平成20)年
東京大学生産技術研究所顧問研究員(脳科学研究)
2010(平成22)年
京都大学大学院工学研究科非常勤講師
東京藝術大学経営協議会委員

● 省庁関連
2006(平成18)年
総務省ICT国際競争力懇談会構成員
総務省 地方の活性化とユビキタスネット社会に関する懇談会構成員
2007(平成19)年
総務省 情報通信審議会委員
2009(平成21)年
国土交通省 YŌKOSO! JAPAN 大使
(現・VISIT JAPAN大使)

● 受賞歴
1999(平成11)年
交通文化賞受賞(運輸大臣表彰)
2003(平成15)年
東京都功労賞受賞
2008(平成20)年
社団法人日本広告業協会功労賞「経済産業大臣賞」受賞
2009(平成21)年
財界研究所　経営者賞受賞
2010(平成22)年
「情報通信月間」総務大臣表彰受賞
第十回 ポーター賞受賞

● 著書
『私はこう考える』(瀧語録刊行会), 1993年
『貢献する気持ち －ホモ・コントリビューエンス－』(紀伊國屋書店), 2001年
『ぐるなび「No.1サイト」への道』(日本経済新聞社), 2006年
『HOMO CONTRIBUENS －THE NEED TO GIVE AND THE SEARCH FOR FULFILMENT－』(RENAISSANCE BOOKS,ENGLAND),2008年
『奉献心 — 人之本能』(中央編訳出版社, 中国), 2009年
『やらなければならないことはやりたいことにしよう』(PHP研究所), 2010年

● 論文
『免疫系に関する数理モデル研究』〈共著〉(東京大学生産技術研究所「生産研究」第62巻), 2010年
『利他的行動と再帰的他者推定』〈共著〉(東京大学生産技術研究所「生産研究」第62巻), 2010年

● 雑誌
雑誌『PUBLIC SPACE』(財団法人日本交通文化協会)編集長(1982年～1994年)